

光明眞言功德繪詞書

(公刊)

# 小 引

一、此繪卷の原初の名は明かでない。此處に於ては國寶指定の名稱に従つて置いた。

一、詞書を活字に移すに當つては、原本の體を尊重して、改行は原本の儘とし、誤字と思はれるものも其儘にとゞめた。但し異體の假名はすべて現行のものに改めたのは例の通りである。

一、此繪卷についての一通りの解説は別掲拙稿を參照されたく、全體の體裁については又別掲全卷の縮寫圖版を參照されんことを望む

一、左に各紙法量を表示した。(單位糎)

(梅津)

本紙	上卷 cm		中卷 cm		下卷 cm	
第 1	43.5	詞一	39.4	詞一	42.0	詞一
2	45.7	〃	44.2	繪一	45.7	〃
3	45.3	〃	44.7	〃	45.6	〃
4	45.9	繪一	50.0	〃	45.3	〃
5	44.8	〃	44.5	詞二	31.5	〃
6	45.7	〃	45.0	繪二	44.9	繪一
7	45.6	〃	44.6	〃	45.5	〃
8	45.4	詞二	43.7	詞三	45.3	〃
9	45.4	繪二	44.4	繪三	42.7	詞二
10	45.9	〃	45.2	〃	44.8	〃
11	45.7	〃	44.8	〃	44.7	繪二
12	45.6	〃	43.7	詞四	45.2	〃
13	45.6	詞三	44.9	繪四	45.0	〃
14	45.5	繪三	45.0	〃	45.3	〃
15	45.4	〃	44.2	〃	30.2	詞三
16	45.4	〃	44.0	詞五	45.9	繪三
17	45.4	〃	45.1	〃	41.5	詞四
18	45.0	〃	36.7	〃	45.5	〃
19	45.2	詞四	44.9	繪五	45.2	繪四
20	45.2	繪四	45.0	〃	45.0	〃
21	45.3	〃	45.1	〃	41.5	詞五
22	45.2	〃	44.7	〃	44.7	繪五
23	45.9	〃	45.1	〃	43.9	〃
24	45.2	詞五	45.1	〃		
25	45.0	繪五	45.3	〃		
26	44.9	〃	45.0	〃		
27	24.2	詞六	45.0	〃		
28	44.6	繪六	45.0	〃		
29	44.5	〃	43.4	詞六		
30	32.5	詞七	44.2	繪六		
31	44.5	繪七	43.9	〃		
32	19.3	詞八				
33	44.2	繪八				
34	26.7	詞九				
35	43.6	繪九				
合 計	1502.8		1370.8		996.9	
豎 各	29.3糎					

(上卷)

(第一段)

夫秘密眞言究竟大乘の教は  
諸佛自證の奧藏衆生頓悟の直  
路なり是以青龍寺の和尚常に  
門徒に告ての給はく人の貴は  
國王にすぎず法の寂なるは  
密藏にはしかす牛羊にむちうち  
て道におもむくものは久しくして  
はしめていたり神通に駕して  
跋涉するときは勞せずして達す  
冒地のゑかたきにはあらずたゝこの  
法にあふことのたやすからざるなり  
こゝにしりぬ値遇結縁の輩において  
はかならず出離解脱の人たることを  
就中に光明眞言は儀軌に云大日  
彌陀兩軀の如來の肝心現在未來  
二世得益の明呪なり三世の没駄は  
この呪をたちて正覺を成し  
十方の薩埵は此の呪によりて果位  
いたり給へり昔釋迦如來忍辱仙人と  
して常に此呪を誦し給しかは頂より  
百千の光明をはなちて三千大千世  
界を照曜して正覺をなり給かゆへ  
光明眞言となつくといへり現世には  
陶朱綺頰か富にはこり梅生松子か  
よはひをたち當來には六趣輪廻の

貧里をはなれて二轉妙覺の堺に

いたらんこと只此咒力なり抑秘密神咒の

義理たやすく畫圖にあらはす事

其憚ありといへとも愚癡暗鈍の男女

速に信心を發起せんこと豈その益なか

らんやこれによりていさゝか九牛の

一毛の功能をあけて六趣群類の

拔濟にそなふんとなり

(繪)

(第二段)

愚癡は諸惡の根源なり惡業煩惱

みな愚癡によりてこれをなす愚癡

はなれずは佛道にすゝむへからず

智恵は暗夜を破する光明結使をたつ

利劔なり智恵なくは惡趣をまぬか

るへからず然を東方にむかひてこの

光明眞言十萬遍を誦すれば愚癡を

はなれて大智恵を得と説けり

誠に万人の師範となりてあまねく

仰崇せらるゝこと智恵にすぎたるは

なし

(繪)

(第三段)

貧は諸道の妨といふは内外の明文

なりまつくしては供佛施僧の善

業もいとなむにたらす堂舍塔廟の

建立も勵にちからなし就中あさの

(切)

(切)

衣はたへをかくさすその飯口を

むなしくするほとになりぬれば相

傳の眷屬もしたかわす寵愛の妻子

もあひはなるその悲歎のいたりおもき

病にもすきたり是前世の慳貪の

果なり此人北方にむかひて光明

眞言を二十萬遍誦すれば忽に

貧窮の報をあらためて大富貴の

身となるなり

(繪)

(第四段)

夫人間の榮耀を思に貴人の愛

敬にすぎたる眉目はなしすたれ

たる官をつきたえたる家をもお

こす皆是貴人愛敬のいたすところ

なり又人望かけぬれば人として

人にあらすしかあれば東方にむかひて

この光明眞言三十萬遍を誦すれば

上下諸人の愛敬をゑて福貴自在

なる事をうと説けり

(繪)

(第五段)

この光明眞言を誦持せん法師の

其身を吹かん風にあたる一切衆生

は悉く諸の苦果を解脱して

一佛土の界會に入らむ并に

禽獸異類ともに畜生の業報を

(切)

(切)

(切)

(切)

はなれて皆悉く人天の果報をうと説り

(繪)

(第六段)

孝子率都婆を造てこの咒に無量壽の梵字をかきそへて父母の墓に安置すれば無量劫を経て其靈魂惡趣におちず胎生をうけずして蓮花の上に化生す邊地下賤の生をうけず極樂淨土の佛前に生ると説り

(繪)

(第七段)

女人は三從の身として五障の愁あり若女身をいとひて男身を願は、此光明眞言を誦持すへしかならず女身をすて、男子の身となるへし又とこしなへに眞言を誦持する女人は大梵天王とうまると説けり

(繪)

(第八段)

若人天上に生まれんと思は、天にあおひて目を閉て此光明眞言を千遍誦すればかならず天上に生して諸のたのしみを受と説り

(繪)

(第九段)

凡一切の女人はみめかたちをもちてさひわひとす若その形みにくき女人ありて此光明眞言一万遍誦持すれば端正のかたちをゑて諸人のために愛敬せらるると説けり

(繪)

光明眞言功德繪詞三卷者

冥法中價眞三千之法寶

也今奉納孔都山寺寶庫

以期龍華之曉焉伏願令

法久住利益人天

イフナラ玖南良久乃底乃ソコマデ  
モ遙カニ照ラセ山乃端乃月  
端乃月

叡岳大行滿願海宇大悲敬記<sup>時年四十三</sup>

イフナラ玖南良久乃底乃ソコマデ

モ遙カニ照ラセ山乃端乃月

端乃月

端乃月

(中卷)

(第一段)

第一の卷には現世の得益を説事をあら

はしこの卷には四惡趣の苦果をすくふ事をあかすへし

第一に地獄道は鐵城かたく閉て熱鐵を地とし猛火洞燃として四面に灾徹せりなけとも涙なし火炎眼を焼かゆへにさけへとも聲いてす鐵丸のんとをとちたるかゆへなり斫刻磨礱のかなしみ刀山劔樹のくるしみたへかたくしのひかたししかあるを未申の方にむきてこの光明眞言四十九遍を誦すればたちまちに地獄の苦患をはなれて極樂淨土の蓮華より化生すと説けり

(繪)

(第二段)

第二に餓鬼道は枯濁憔悴して子を食してうへをやすめ飢羸憔悴してなつきをくたきて命をたすく百菓林にむすふとらんとすればことく刀輪なり万水海に入るのまんとすれば皆猛火なり苦報のつたなき事餓鬼にすきたるはなししかあるを戌亥の方にむきて光明眞言四十九遍を誦すればかならず餓鬼道をはなれて極樂界に生すと儀軌の文にあきらかなり

(繪)

(第三段)

第三に畜生道はそこかたち千品にして大小あひまはりたかひにあひ噉食してさらにしるところなし或は諸根不具にしてた

完身のみあるたくひもあり或は聾駭無足にして宛轉腹行のやからもあり身あればくるしみあり心あればうれへあり飛蛾は火の色にふけて身をほろほし蚊虻は蛛網にかゝりて命をすつ山鹿野麋なを東西にまとひ峽猿

泉嶺昏曉をわきまへず癡暗まことになかく本覺もともとし悠々たる生死輪

轉しておはりなく范々たる苦海出離いつれの時そしかあるを丑寅の方にむかひてこの光明眞言四十九遍を誦すれば畜生道の苦をすくひて安養淨刹のたのしみをえしむと説けり

(繪)

(第四段)

第四に修羅道は常に瞋恚をふくみてとこしなへに怨心をいたく天帝と權威をあらそひてしは喜見城をおかす或は須彌山をになひ或時は日月輪をにきるしかありといへとも天帝のいくさのために摧破せらるそのときのくるしみ説つくすへからすしかあれともまたく諂誑のおもひをやすめ又調伏の心なしこれすなはち瞋恚怨害の苦報なりしかあるに辰巳の方にむかひて光明眞言四十九遍を誦すれば修羅道の苦をすくひて極樂界に引導せしむと説けり

(繪)

(第五段)

若諸の衆生ありて放逸にして懺愧の心なく

光明眞言功德繪詞々書

愚癡にして罪業をおそれず日夜に十惡五逆を造り朝暮に斂盜姦妄を犯してその

つみなを微塵の世界にみてるかことくならんかくのことくの衆生大惡病をうけ苦痛逼迫して身壞し命終してかならず諸の惡道に

おちて獨たしなみ獨くるしみて出離の期なからんこの時に眞言行者ありて同躰の

大悲をおこし弘誓の秘術をいたして山川清淨の所にして土砂をとり垢穢を洗

除して壇上に安置し説のことくこの光明眞言を誦し加持する事一百八遍

して尸陀林の中にゆきて彼の重罪の衆生の死骸のうへ或ははかの上に散すれば

かの亡者若は地獄の中若は餓鬼の中若は修羅傍生の中にもあれこの一切不空

如來不空毗盧遮那如來眞實本願大灌頂光。眞言神通威力加持土砂の力をもちて

時に應して大光明きたりて亡者の身を照し各所苦の罪報をすて、速に西方極樂國土に

往生し蓮花より化生して正覺を成すへしととけり因果相感のみち自業自得のことはりは

影の鏡にうつり谷の響に應するか如して佛力も法力もたやすく轉する事かたししかある

に一生無善の人すてに三惡趣に墮せる他人の修善によりて忽に決定應受の苦報を

すくふ事この秘密神咒敵勝の功力にすぎたるはなし土砂はこれ色法なり眞言はすなはち

如來の大智なり色心不二のゆへに土砂眞言の加持にこたへて不思議の薰力をほとこす元曉法師の遊心安樂道にこの事を

釋して云他作自受の理りなしといへともしかも緣起難思のちからありすなはちしりぬ咒砂に

あふをもちて即有縁を成すもしいさこをかうふらすは何ぞ脱期を論せん大悲無方なり長舌

たふらかす事なし有心の君子誰か奉行せざらんやと土砂を墳墓にちらすによりて光

明亡者の身をてらす事誠に眞言加持の功力緣起難思の秘術なるをやされはこの

土砂は貧人のためには摩尼のごとし貧業をのそひて富饒をあたふみにくき人のためには

蓮花のごとし怨家もみな愛敬をなすいやしき人のためには光明のごとし大勢を具して

威徳世にかうふらしむこのゆへに恭敬頂戴すればその福をまし渴仰隨身すればは求

願をみたすといふことなし眞言加持難思の巨益仰へし信へし

(繪)

(第六段)

若人ありて先世の業力によりて重病をうけ

身心逼迫して足ひるみ行歩する事えず苦惱万端ならん時に行人ありて病者の前に

して光明眞言を毎日一千八十遍高聲に唱れば即日をへすして宿業病障をのそぎ

て身心安樂なり若人鬼神のためになやま

二九

されて魂識悶亂して音を失ひ言語を通する事なからむ時眞言行者かの病人を加持する事一百八遍してかの手をもちて頭面にふるはすなはち惡鬼退散して病惱消滅す凡一切の魘魅魍魎のためになやまされんたくひこの眞言をもちて加持すればみなこと／＼く除癒して敢ておかす事なしかくのことくの得益のふさにのするにいとまあらす儀軌の文をひらきみるへし

(繪)

—(切)—

光明眞言功德繪詞三

卷者傳云畫者豐後

法橋詞筆者毘沙門

堂黃門爲重朝臣

右件本願海襲重珍秘

有年于茲焉今奉納礼

都山寺寶庫以奉獻

五十六億七千卅歲之後

當來導師彌勒慈氏尊

伏願令法久住利益人天

すきみ

慶應元年乙丑冬月

前寂岳大行滿常樂院願海(花押)

(下卷)

(第一段)

以前の二の卷には儀軌本經の説相をひきて功能の甚深なることをあらはせり今この卷には現證の勝利を記して後代の信心をまし末世の得益を示して當來の證果をすゝめむとなり抑洛陽のほとり北山のふもとに定圓といふ僧ありき天性癡鈍にして稽古鑽仰の慙にもたえす貧窮孤獨にして功德善品を殖る事なししかるあひた後世菩提の事いかゝすへきと思とりて梅尾の明恵上人の御許にまいりて此事を歎申ければ上人仰られて云佛道修行の要法かならずしも癡鈍によらず貧窮をもきらふへからすたゝ信心をもちてさきとす凡諸佛菩薩の悲願神咒經典の功能いつれもすぐれたりといへとも光明眞言の功力にすぎたるはなし儀軌本經をひらきみるに愚癡の者十万遍を誦すれば智者となり貧窮の者北方にむかひて廿万遍を誦すれば大富貴をえわつかに二三七遍耳にふるれば一切の重罪を減して極樂に往生し又病者の前にして二三日高聲に誦すればその病かならず平癒すと説けりかやうの功能甚深不可思議なりくはしくは本儀軌をひらき見給へし又まのあたり現證の事ありき我が住坊に定龍といふ小僧あり愚昧闇鈍の者にして行學

—(切)—

にもたえずたゝ晝夜に光明眞言を誦して他事なししかるに聊病惱の事ありて去貞應元年八月廿八日酉の時より寅の時まで悶絶すその間夢中の心地してひとり曠野を行きけるに人のさけふこゑありければその聲につきて三四町はかりかへりみればその所に罪人おほく／＼の苦患をうく或は執縛をかふり或は一の大なるはかりに諸の人をかけてはかるをみる怖畏の心甚し爰にたけ八尺はかりにて赤面蓬頭なる鬼ありてこの定龍をはかりにかけむとするに弓箭をもちたる俗躰の人ありてこれを制止してかけしめす定龍恐怖のあまりに光明眞言を誦して餘念なししかるにこの冥官しきりに定龍を敬重す冥官の云此僧をはかりにかくへからすいそき本郷にかへすへしよくうやまうへき僧なりと下知しければその時梨子等の菓子をつるき折敷にきて供養すこれを食する時一人の獄卒の云この僧は光明眞言の功力によりてかへさるへきなりふるき折敷にきて供養する事しかるへからすといふ又冥官の云はやく本郷へ歸給へしとその時かへらんとするに路黑暗にして前後をわきまへす又光明眞言を誦するに聲につきて白青色の光明定龍前に照し來る猶心をいたしてこれを誦するに光明こりあつまりて周遍し

—(切)—

て虚空にみちぬこゝにかへらんとするに身の  
力たゆみあゆまんとするにかなはず重て  
眞言を誦するにその身かろくなりて虚空  
にあかりて空をとひゆくとおもひてよみ  
かへりぬ此事をきゝしよりいよゝゝ信仰して

この眞言を誦持す本説といひ定龍か  
現證といひ嚴重の巨益誰か信受し奉  
行せさらんや汝も定龍かこゝと誠をいたし

この眞言を誦せは現當二世の所求かならず  
成就すへき事更疑ふへからずとの給

しかは渴仰<sup>肝</sup>に銘し信心骨に徹

てやかて彼の眞言を受たてまつりて

晝夜不斷に誦する事退轉なし或

時この僧病痾俄に侵して頓死の事

ありき同行の僧とも悲涙し戀慕

すれともたすくるに力をよほす此定圓

をちかき野邊にそ送をきける禽鳥

噉犬の類ひ前後に飛走すれとも三日に

をよふまで更噉食する事なし同行

不思議のおもひをなし日々に行て

見侍ける

(繪)

(第二段)

此定圓命終の後夢のことくしてくらき

道を行けるにうしろに青き鬼あり

道に赤き鬼ありてほむらをはきいた

す上人のかたり給ひし定龍か冥途の

(切)

(切)

事をおもひいたし餘念なく光明眞

言を誦するに口より光明いて、ほのを

身にかゝらす鬼神この光明をみておそれ

おのゝく氣色ありかくて行ほとに大なる

門の前にゆきつきつこゝに又鬼神あ

またあり怖畏のあまりにひさまつきて

眞言を數十遍聲をあけて誦すれば

鬼みな跪て渴仰の首をたる一人の鬼

の云この眞言の光にあたりて只今都率

天に生すへしといひ或は忉利天に

生すへしといひてみなうせぬ不思議の

おもひをなしてかの門より内へ入て見侍

ければ宮殿樓閣臺をならへ金銀珠

玉室をかざる其内に琰魔王威徳

巍々としています即定圓をめし

ての給く汝明恵上人の教に隨て光

明眞言を誦する事おこたらすこれに

よりて身より光明を出現す隨喜はな

はたふかし汝惡趣の人にあらすはやく

本土に歸て彼の上人にこのよしを

かたり奉りあまねく諸人を教化し

汝も恒に誦持してかならず當來

に極樂界に往詣すへしと示し

給ひけり

(繪)

(第三段)

定圓隨喜の思に往してもとの

(切)

(切)

(切)

方へ歸る心地して狹少なる路を

やうゝにくゝりゆくと覺て

ほとなく蘇生しぬおくりをき

たる野邊におきあかりてみれば

禽獸のたくひ前後にまほりる

たれとも形骸あへてつゝかなし

(繪)

(第四段)

其後やうゝに力つきて本坊にかへり

ければ同行の僧ともあやしき驚事

かきりなして事のよししくはしく

かたりければ僧とも奇特のおもひ

をなす終焉よりこのかた三ヶ日

にそなりにけるいそき梶尾の上人の

御許へまいりて是等の次第くはしく

かたり申ければ上人悲泣感歎し

ての給はく汝はわれを知識としていて

かたき惡趣の果報をまぬかれぬ我

は汝を知識としていよゝゝ拔濟の

方法をいたさんとて高山寺の内石水

院の西に盤石ありその東の傍に

清水流たりその中の土砂をとり

て金銅の器に入れて壇上に安置

し佛舍利のことくして三時行

法のつるてにこれを加持して願は

たとひ山川堺をへたてゝ見聞の縁なき

人又禽獸異類の形なりとも或は

はかの上にをき或は死骸の上に  
散し或は存生にかけしめて彼等  
をしてなく三途の苦報をすくひ

九品の樂邦にあそはしめんとふかく  
誓願し給きこれ偏にこの兩人現證  
のゆへなり彼の土砂に不思議の利益  
おほき事人みないにいひ傳たり

(繪)

(第五段)

此定圓常には黄泉の苦域冥途の  
ありさま更にわするゝひまなければ厭離  
穢土のおもひ切にして欣求淨刹のつと  
めおこたる時なし行住坐臥に彼の

眞言を誦して他事を忘れ造次眞  
沖に聲を勵まして念誦の功を

積む其後八ヶ年をへて少病少

惱端坐合掌して終に往生の素

懷をそとける紫雲虚空にたな

ひき光明草庵にみたり見る人渴

仰の心をいたし聞者隨喜の界に住

せすといふ事なし

(繪)

慶應元年乙丑冬月奉

納都山寺寶庫畢

伏願令法久住利益人天

叡岳大行滿願海敬白

右壹部三卷東山八坂吉祥園院  
常住繪也

應永五年二月 日

夫秘密眞言究竟

第一乃卷には現世の

以前の一二の卷には

右 三卷全部

毘沙門堂黃門爲重卿

芳翰無疑者也由

傳予家今納百螺山

鳳閣密寺道場永祈

現當之悉地仍加證驗

而已

天明七曆夷則上旬

古筆  
了意回

山ハサケ海ハヒルトモアヤマ

タチ彌勒乃御代ニ傳ヒ玉ヘヤ

(切)

(切)